

愛のアンチノミー

愛と自由意志についての哲学的考察

井保 和也

はじめに

真の愛は自由意志を必要とするように思われる。つまり、次の N は真であるように思われる。

N : x が y を愛しているとき、もしその愛が x の自由意志によるものではないならば、その愛は真の愛ではあり得ない。

例えば、もしある人が別の人を愛するように洗脳されているならば、たとえその愛がどれほど情熱的であるとしても、それは真の愛ではないように思われる。なぜなら、その愛は洗脳によって強制されたものに過ぎず、したがって、自由意志によるものではないからである。

その一方で、真の愛は自由意志を必要としないようにも思われる。つまり、次の U は真であるように思われる。

U : x が y を愛しているとき、たとえその愛が x の自由意志によるものではないとしても、その愛は真の愛であり得る。

そもそも、ほとんどの場合、ある人を愛するかどうかは、自由意志によって選択することができるようなものではないだろう。それにもかかわらず、この不自由さは愛の真正さを少しも損なわないように思われる。それどころか、まさにこの不自由さこそが、愛に真正さを与えているようにすら思われるのである¹。

このように、N と U はいずれも真であるように思われる。ところが、もしそれが本当であるならば、私たちはある問題に直面することになる。なぜなら、N と U の両方が真であるということは、すなわち、真の愛は一方で自由意志を必要とし、他方で自由意志を必要としないということを意味しているが、これは矛盾であるように思われるからである²。本稿では、この問題を愛のアンチノミーと呼ぶことにしよう。

愛のアンチノミーを解決するためには、私たちは次の三つの戦略のうちのいずれかを採用しなければならない。

戦略 α : N が偽であることを示す。

戦略 β : U が偽であることを示す。

戦略 γ : N と U は矛盾していないことを示す。

¹ 「恋に落ちる」(fall in love) や「運命の人」(my destiny) といった慣用表現が存在することも、不自由さが愛に真正さを与えるものであることを示唆しているように思われる。

² ただし、厳密に言えば、N と U が矛盾するのは、x の y に対する愛が、x の自由意志によるものではないと仮定した場合に限られる。

では、私たちはこれらの戦略のうちのどれを採用すべきだろうか。本稿の目的は、この問いに対して、戦略 γ が最も有望であるということを示し、愛のアンチノミーを解決へと導くことである。

本稿の議論は以下のように進む。まず、第1節では、愛のアンチノミーを解決するための予備的考察を行う。そして、第2節では、Nがある程度強い直観であることを確認し、戦略 α がそれほど有望な選択肢ではないことを示す。同様に、第3節では、Uがある程度強い直観であることを確認し、戦略 β もそれほど有望な選択肢ではないことを示す。それに対して、第4節では、私が愛の因果説と呼ぶ理論に訴えて、戦略 γ が有望な選択肢であることを示す。第5節では、愛の因果説を予想される反論から擁護する。そして、本稿の最後では、本稿の考察が、自由意志問題とエンハンスメントの倫理に対して、どのような含意を持つのかを簡単に考察する。

1. 予備的考察

愛のアンチノミーそのものを考察する前に、その予備的考察として、まず、愛のアンチノミーで問題となっている愛がどのようなタイプの愛であるかを簡単に規定し、その後に、「真の愛」という言葉で私が何を意味しているのかを明らかにしておこう。

1.1 愛の種類

愛 (love) には様々なタイプのものがある。まず、「愛好」、「愛用」、「愛読」、「愛飲」などのように、非人格的な存在者を対象とする愛がある。この意味での愛を「非対人的愛」と呼ぶことにしよう。当然の

ことながら、愛のアンチノミーで問題となっているのは、この非対人的愛ではなく、人格的な存在者を対象とする愛、すなわち、「対人的愛」(personal love) である³。

ヘルムによれば、古代ギリシアから始まる哲学的伝統においては、対人的愛は、エロス (eros)、アガペー (agape)、フィリア (philia) という三つのタイプに分類されてきた (Helm 2017, sec.1)。エロスとは、ある対象に対する情熱的な欲求、特に、性的な欲求を伴う愛である。アガペーは、本来、キリスト教における神の人間に対する無限の愛だったが、人間の神に対する愛も含まれるようになり、さらには、人間たちが互いに抱く無償の愛にも拡張されるようになった。フィリアとは、友人、家族、仕事仲間などに対して向けられる友好的な気持ちである。

現代の分析哲学においては、キリスト教の色合いが濃いアガペーよりも、エロスとフィリアが主題となることが多い。しかし、そこでは、エロスとフィリアの区別は曖昧になっている⁴。そして、多くの場合、エロスはフィリアの一部であり、フィリアの中でも性的な欲求を伴うものがエロスだと考えられている。愛のアンチノミーで問題

³ ただし、当然のことながら、愛のアンチノミーで問題となっているのは、対人的愛の中でも、自己に対する愛ではなく、他者に対する愛である。

⁴ これは、感情心理学において、愛に関する標準的な理論と見なされているスターンバーグの愛の三角理論 (triangular theory of love) とも一致する傾向である (Sternberg 1986)。この理論によれば、親密さ (intimacy)、情熱 (passion)、コミットメント (commitment) という三つの要素のバランスによって、愛を分類することができる。親密さは相手に対する親しみの気持ちを指し、情熱は性的な欲求を指し、コミットメントは相手との関係を継続させようという意志を指す。例えば、金政と大坊の日本人を対象とした研究では、関係が友人 (フィリア) から恋人 (エロス) に移行するにつれて、三つの要素のすべてが高まっていくことがわかっている (金政・大坊 2013)。

となっている愛も、この意味でのエロスであると考えてほしい⁵。日常言語の中で最も近い意味を持つ言葉は、おそらく、「恋愛」(romantic love) だろう。

1.2 真の愛

最初に愛のアンチノミーがどのような問題であるかを解説した際に、特に何の説明もせずに「真の愛」(authentic love) という言葉を使用した。ここで言う真の愛とは、「私たちが他者、すなわち、両親、(十分な年齢に達した) 子ども、配偶者、愛人、そして友人に向けてほしいと思っている種類の愛」(Kane 1998, p.88) であり、「私たちがそれ自体のために探し求める内在的善」(Nyholm 2015, p.190) を持つ愛である。したがって、単なる性的な欲求、支配欲、依存、執着などは、真の愛には該当しない。これは、私たちが「真の愛」と言われて思い浮かべるものから、それほどかけ離れたものではないだろう。

2. 戦略 α

本節からは、前節の予備的考察を踏まえつつ、愛のアンチノミーそのものの考察に取り組むことにしよう。最初にも述べたように、愛のアンチノミーとは、N と U という二つの命題はいずれも真であるように思われるが、それにもかかわらず、これらは矛盾しているという問題だった。そして、この問題を解決するためには、N が偽であることを示す戦略 α か、U が偽であることを示す戦略 β か、N と U が矛

⁵ ソーブルによれば、このタイプの愛の典型的な例は、J. S. ミルとハリエット・テイラーが互いに抱いていた愛である (Soble 1990, p.2)。

盾していないことを示す戦略 γ のいずれかを選択しなければならなかった。本節では、まず、戦略 α が有望な選択肢かどうかを検討することにしてしよう。

私の考えでは、戦略 α はそれほど有望ではない。なぜなら、N はある程度強い直観であるように思われるからである。N は次のような命題だった。

N : x が y を愛しているとき、もしその愛が x の自由意志によるものではないならば、その愛は真の愛ではあり得ない。

N がある程度強い直観であることを理解するために、いくつかの物語を見てみよう。

例えば、J. K. ローリングの『ハリー・ポッターと謎のプリンス』における次の場面を見てほしい。

「ハリー！」出し抜けにロンが呼んだ。

「何だい？」

「ハリー、僕、がまんできない！」

「何を？」

ハリーは今度こそ何かおかしいと思った。ロンは、かなり青い顔をして、今にも吐きそうだった。

「どうしてもあの女のことを考えてしまうんだ！」ロンが、かすれ声で言った。

(中略)

「ロミルダ・ベイン」

ロンはやさしく言った。そのとたん、ロンの顔が、混じりけのない太陽光線を受けたように、パッと輝いたように見えた。

二人はまるまる一分間見つめ合った。そしてハリーが口を開いた。

「冗談だろう？ 冗談言うな」

「僕……ハリー、僕、あの女^{ひと}を愛していると思う」ロンが首をしめられたような声を出した。

「オッケー」

ハリーは、ロンのぼんやりとした目と青白い顔をよく見ようと、ロンに近づいた。

「オッケー……もう一度真顔で言ってみろよ」

「愛してる」ロンは息をはずませながら言った。

「あの女^{ひと}の髪を見たか？ 真っ黒でつやつやして、絹のようになめらかで……それにあの目はどうだ？ ぱっちりした黒い目は？

そしてあの女^{ひと}の――」

「いいかげんにしろ」ハリーはいらいらした。

「冗談はもうおしまいだ。いいか？ もうやめろ」

ハリーは背を向けて立ち去りかけたが、ドアに向かって三歩と行かないうちに、右耳にガツンと一発食らった。ハリーがよろけながら振り返ると、ロンが拳をかまえていた。顔が怒りでゆがみ、またしてもパンチを食らわそうとしていた。

ハリーは本能的に動いた。ポケットから杖を取り出し、何も意識せずに、思いついた呪文を唱えた。

「レビコーパス！」

ロンは悲鳴を上げ、またしてもくるぶしからひねり上げられて逆さまにぶら下がり、ローブがだらりと垂れた。

「何の恨みがあるんだ？」ハリーがどなった。

「君はあの^{ひと}女を侮辱した！ ハリー！ 冗談だなんて言った！」

ロンが叫んだ。血が一度頭に下がって、顔色が徐々に紫色になっていた。

「まともじゃない！」ハリーが言った。「いったい何に取り憑かれた――？」

その時ふと、ロンのベッドで開けっぱなしになっている箱が目についた。事の真相が、暴走するトロール並みの勢いでひらめいた。

「その『大鍋チョコレート』を、どこで手に入れた？」

「僕の誕生日プレゼントだ！」

ロンは体を自由にしようともがいて、空中で大きく回転しながら叫んだ。

「君にも一つやるって言ったじゃないか？」

「さっき床から拾った。そうだろう？」

「僕のベッドから落ちたんだ。わかったら下ろせ！」

「君のベッドから落ちたんじゃない。このまぬけ、まだわからないのか？ それは僕のだ。地図を探してたとき、僕がトランクから放り出したんだ。クリスマスの前にロミルダが僕にくれた『大鍋チョコレート』。全部ほれ薬が仕込んであったんだ！」⁶

⁶ 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』、松岡佑子（訳）、静山社、第18章。

この場面では、ハリーを愛するロミルダが、ハリーに振り向いてもらうために、ハリーに惚れ薬入りのチョコレートを贈るが、ロンがそれを誤って食べてしまったために、ハリーではなくロンがロミルダを愛するようになってしまう、という様子が描かれている。このとき、ある意味で、ロンはロミルダを愛していると言えるだろう。それも、ハリーが自分の愛を「冗談」と言ったことに激高し、ハリーを殴りつけるほど情熱的に愛しているのである。それにもかかわらず、ロンのロミルダに対する愛が真の愛ではないことは明らかだろう。なぜなら、その愛は惚れ薬によって強制的に引き起こされたものに過ぎず、ロンの自由意志によるものではないからである。

シェイクスピアの『真夏の夜の夢』にも、似たような効用の薬が登場する。妖精王オーベロンは、女王ティータニアと喧嘩した腹いせに、いたずら好きの妖精パックに命じて、眠っているティータニアのまぶたに媚薬をぬらせた。眠っている人のまぶたにその媚薬をぬっておくと、その人は目が覚めたときに最初に見たものを愛するようになってしまうのである。不運なことに、ティータニアは、目が覚めたとき、パックの別のいたずらによって頭をロバに変えられた男を最初に見てしまったため、その男を愛するようになってしまう。この物語においても、ティータニアのその男に対する愛が真の愛ではないことは明らかだろう。なぜなら、その愛は媚薬によって強制的に引き起こされたものに過ぎず、ティータニアの自由意志によるものではないからである。

このように、もし愛が強制的に引き起こされたもの、言い換えれば、当人の自由意志とは無関係に引き起こされたものに過ぎないならば、それは真の愛ではないように思われる。このことは、次の事例を考えてみると、より一層明らかになる。

【事例 1】

あなたは自分がある人に愛されていると信じている。しかし、実は、その人のあなたに対する愛は、洗脳によって強制的に引き起こされているものであって、その人の自由意志によるものではないということがわかった。

この場合、あなたは大きな失望や喪失感を感じるのではないだろうか。もしそうであるならば、あなたは、当人の自由意志によらない強制的な愛を、真の愛とは見なしていないことになるはずである。

ここまでの議論を考慮すると、N はある程度強い直観であると言えることができるだろう。このことは、N が偽であることを示す戦略 α が、弾丸を噛む選択肢、すなわち、直観に反した強硬な選択肢であるということを意味している。したがって、戦略 α はそれほど有望な選択肢ではないということが帰結するだろう。

3. 戦略 β

次に、U が偽であることを示す戦略 β が有望な選択肢かどうかを検討することにしよう。私の考えでは、戦略 α と同じ理由で、戦略 β

もそれほど有望な選択肢ではない。つまり、Nと同様に、Uもある程度強い直観なのである。Uは次のような命題だった。

U: xがyを愛しているとき、たとえその愛がxの自由意志によるものではないとしても、その愛は真の愛であり得る。

Uがある程度強い直観であることを理解するために、今度は、いくつかの詩歌を見てみよう。

例えば、ゲーテの「新しい恋、新しいいのち」という詩を見てほしい。

心よ、わが心よ、どうしたというのか。
何がお前をそのように押しつけるのか。
なんという異様の新しいいのち。
今までのお前の面影はもはや見るよしもない。
お前の愛していたものは皆消え失せた。
お前を悲しませていたものも消え失せた。
お前の努力も、お前の安らけさも――
ああ、いかなればとてかく変りはてたのか。

お前を限りない力でつなぎ留めるのは、
あの若々しい花の姿か、
あのいとおいしい人の姿か、
真心とやさしい心に満ちたあのまなざしか。

ひと思いにあの人から離れ、
逃げ去ろうと心を励ましても、
たちまちに私の足は
ああ、あの人の方へともどって行く。

断つによしない
この魔法の細糸で、
愛くるしい快活な娘は
私を否応なしに縛ってしまう。
娘の魔法の環にとらえられ
私のいのちは娘の思いのままだ。
変りようの、ああ、なんという大きさ！
恋よ、恋よ！ 私を解き放してくれ！⁷

この詩の中で、「私」の「娘」に対する愛は、「私」を縛りつける「魔法の細糸」に喩えられている。つまり、「私」の「娘」に対する愛は、自由意志によって抗うことができない、どうしようもないものなのである。

また、大伴坂上郎女の次の歌も見てみよう。

思はじと言ひてしものをはねず色のうつろひやすき我が心かも⁸

⁷ 『ゲーテ詩集』、高橋健二（訳）、新潮文庫。

⁸ 『万葉集』、巻四、六五七。

この歌の意味は、「あなたのことは思わないようにしようと言っていたはずなのに、はねずで染めた色がすぐに褪せてしまうように、私の心もすぐに揺らいでしまい、またあなたのことを思ってしまうのです」ぐらいになるだろう。つまり、この歌では、愛するのを止めようと決意しても、その決意がすぐに揺らいでしまうことが、はねずで染めた色がすぐに褪せてしまうことに喩えて表現されているのである。やはり、愛は自由意志によって抗うことができないものであることがわかる。

このように、これらの詩歌では、愛は自由意志では抗うことができないものとして描かれている。では、これらの愛は、自由意志では抗うことができないものとして描かれることによって、真の愛ではなくなってしまうのだろうか。そのようには思われたい。これらの愛は、間違いなく、真の愛であるように見える。それどころか、これらの愛は、自由意志では抗うことができないものとして描かれているからこそ、真の愛であるように見えるのではないだろうか。このことは、次の事例を見てみると、一層明らかになるだろう。

【事例 2】

あなたは自分がある人に愛されているかどうかを疑っている。

しかし、実は、その人のあなたに対する愛は、その人が自由意志によって止めようとしても、決して止められないものであるということがわかった。

この場合、あなたは大きな安堵や満足感を感じるのではないだろうか。もしそうであるならば、あなたは自由意志によらない愛も真の愛と見なしていることになるはずである。

ここまでの議論を考慮すると、U はある程度強い直観であると言えることができるだろう。このことは、U が偽であることを示す戦略 β も、弾丸を噛む選択肢、すなわち、直観に反した強硬な選択肢であるということを意味している。したがって、戦略 β もそれほど有望な選択肢ではないことになるだろう。

4. 戦略 γ

戦略 α と戦略 β はいずれも弾丸を噛む選択肢、すなわち、直観に反した強硬な選択肢であり、したがって、それほど有望ではないことが明らかになった。もちろん、このことから、これらの戦略は採用すべきではないということが即座に帰結するわけではない。しかし、たとえそうであるとしても、もしこれら以外に有望な戦略があるならば、あえてこれらの戦略を採用する理由はないことになるだろう。そこで、本節では、残された戦略 γ を検討することにしよう。

4.1 基本方針

まず、戦略 γ の基本方針を明らかにしておこう。戦略 γ とは、N と U は実際には矛盾していないこと、すなわち、愛のアンチノミーは見せかけの問題に過ぎないことを示す戦略だった。私の考えでは、この戦略 γ は有望である。なぜなら、N の中で使われている「自由意志」という言葉と、U の中で使われている「自由意志」という言葉は、そ

れぞれ異なるタイプの自由意志を意味していると考えることができるからである。つまり、Nの「自由意志」が意味しているのは、真の愛にとって必要なタイプの自由意志であるが、その一方で、Uの「自由意志」が意味しているのは、真の愛にとって必要ではないタイプの自由意志に過ぎないのである。ここで、前者のタイプの自由意志をAL自由意志、後者のタイプの自由意志を非AL自由意志と呼ぶことにしよう。すると、NとUの両方が同時に真であると主張することは、真の愛はAL自由意志を必要とするが、非AL自由意志は必要としないと主張することに過ぎず、したがって、矛盾でも何でもないことになるだろう⁹。こうして、戦略γは愛のアンチノミーを解決へと導くのである。

しかし、当然のことながら、戦略γは次の問いに答えなければならない。それは、AL自由意志はどのようなものであるのかという問いである¹⁰。幸いにも、第2節と第3節の議論から、AL自由意志は、少なくとも次のAL要件の両方を同時に満たすものであることがわかっている。

⁹ ひょっとすると、自由意志のタイプを区別することによって矛盾を解消するのではなく、自由意志が必要になるタイミングを区別することによって矛盾を解消する方が、愛のアンチノミーを簡単に解決できるのではないかと思う人がいるかもしれない。このように思う人は、例えば、自由意志が必要になるのは、愛するようになるタイミングだけであり、一度愛するようになれば、その後は、自由意志は必要ないと主張するだろう (cf. Savulescu & Sandberg 2008, pp.39-40)。しかし、この戦略は上手くいかない。なぜなら、「恋に落ちる」や「一目ぼれ」といった慣用表現からもわかるように、愛するようになった後はもちろん、愛するようになるタイミングにおいても、自由意志は不要であるように思われるからである。

¹⁰ 非AL自由意志については、ここで考える必要はないだろう。なぜなら、非AL自由意志はAL自由意志ではないタイプの自由意志に過ぎないからである。

AL 要件 1：AL 自由意志は（第 3 節で見た物語に登場する惚れ薬や媚薬などによる）強制とは両立しない。

AL 要件 2：AL 自由意志は（第 4 節で見た詩歌の中で表現されている）愛の抗い難さとは両立する。

つまり、これら二つの要件の両方を同時に満たす自由意志こそが、AL 自由意志なのである。しかし、このように言うだけでは、先の問いに対する回答としては不十分である。なぜなら、これだけでは、AL 自由意志が本当にこの世界に存在するのか、あるいは、少なくとも、この世界に存在し得るのかがわからないからである。結局のところ、もし AL 自由意志がこの世界に存在し得ないならば、愛のアンチノミーは何一つ解決されていないことになってしまうのである。したがって、AL 自由意志はどのようなものであるのかという問いに対する回答は、AL 要件の両方を同時に満たしつつも、AL 自由意志が本当に存在し得るのかを検証することができるほど、AL 自由意志の内実を規定するものでなければならないのである。

私の考えでは、この要請を満たす回答を与えるためには、私が愛の因果説と呼ぶ理論に訴える必要がある。そこで、以下では、愛の因果説がどのような理論であるのかを提示し、洗練化することによって、AL 自由意志がどのようなものであるのかという問いに対して、満足のいく回答を与えることにしよう。

4.2 愛の因果説

愛の因果説は、次の CTL のように定義することができる。

CTL : x が y を愛しているとき、それが真の愛であるのは、その愛が適切な因果的プロセスによって引き起こされている場合に限られる。

もちろん、CTL の成否は「適切な因果的プロセス」という部分をどのように解釈するかにかかっている。そこで、以下では、この部分をどのように解釈すべきかを検討することにしよう。

4.2.1 CTL1

例えば、議論のための叩き台として、CTL の「適切な因果的プロセス」という部分を、単純に「 y 」と解釈することにしよう。すると、CTL は次の CTL1 に書き換えることができる。

CTL1 : x が y を愛しているとき、その愛が真の愛であるのは、その愛が y によって引き起こされている場合に限られる。

CTL1 は偽であるわけではないが、必要条件としては弱すぎる¹¹。なぜなら、 x の y に対する愛が、 y によって因果的に引き起こされているにもかかわらず、その愛が真の愛ではない事例が存在するからである。そうした事例の一つは、第 3 節で見た『ハリー・ポッターと謎のプリンス』の物語である。この物語では、ロンのロミルダに対する

¹¹ 私たちがここで探求している必要条件は、メレが言うところの最も強い必要条件である (Mele 2006, p.27, n.18)。

愛は、まさにロミルダによって引き起こされているが、その愛は真の愛ではなかったはずである。したがって、CTL1 はより強い必要条件に修正される必要があるだろう。

4.2.2 CTL2

では、CTL1 をより強い必要条件に修正するためには、どうすればよいだろうか。この点に関して、ソーブルは次のように主張する。

特に、私は愛を「性質基盤的」(property-based)と言いたい。つまり、 x が y を愛しているとき、このことは、魅力的であるか、賞賛に値するか、または、価値がある諸性質のセットを y が持っているか、あるいは、持っている x が信じていることの結果として説明することができる。 x が y を愛しているのは、 y が S を持っているか、あるいは、持っている x が信じたり知覚したりしているからなのである。(Soble 1990, p.4) ¹²

¹² ソーブルはこの後続く箇所、次のように言っている。

さらに、対人的愛は「理由依存的」(reason-dependent)である。つまり、 x が y を愛しているとき、(十分な自己精査が行われるならば) x は、「なぜあなたは y を愛しているのか？」という問いに対して、 y が S を持っているという点を指摘し、 y を愛する理由を与えることによって、答えることができるのである。(Soble 1990, p.4)

つまり、ソーブルによれば、 x の y に対する愛が真の愛であるためには、 x の y に対する愛は、 x が y を愛する理由によって引き起こされていなければならないのである。私はこの見解に概ね賛成しているが、ここでは採用しない。その理由は二つある。第一に、ここで言われている「 y を愛する理由」が、規範理由なのか、動機理由なのか、それとも説明理由なのかははっきりしない。第二に、以下で示すように、理由の概念に訴えなくとも、愛のアンチノミーを解決することは可能である。

つまり、ソーブルによれば、 x の y に対する愛が真の愛であるためには、その愛が y によって引き起こされているのではなく、美しい、親切である、頭がよいといった、 y が持つ特定の性質によって引き起こされていなければならないのである。そこで、CTL1 を CTL2 のように修正することにしよう。

CTL2 : x が y を愛しているとき、その愛が真の愛であるのは、 y がある特定の性質(群) S を持っている(と x が認識している)ことが、その愛を引き起こしている場合に限られる¹³。

確かに、CTL2 は『ハリー・ポッターと謎のプリンス』の事例に上手く対処することができる。なぜなら、この事例では、ロンのロミルダに対する愛は、ロミルダが持つ特定の性質によって引き起こされたものというよりは、ロミルダの惚れ薬の効果によって引き起こされたものであるからである。しかし、CTL2 は次の事例 3 に上手く対処することができない。

¹³ 哲学史上、CTL2 は多くの支持を得てきた。CTL2 を支持していると解釈することができる哲学者のテキストには、例えば、プラトンの『饗宴』におけるソクラテスの演説、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の第 8 巻、デカルトの『情念論』の第 2 部、スピノザの『エチカ』の第 3 部、ヒュームの『人間本性論』の第 2 巻第 2 部などがある。現代では、ペティットが CTL2 を支持しているように思われる (Pettit 2015, ch.1)。ペティットによれば、 x が y を愛しているとき、その愛が真の愛であるためには、 x が自身のうちに他者を愛する傾向性を持っていて、かつ、 y がその内的な傾向性を活性化することが必要なのである。

【事例 3】

アンドリューはヴァイオリンが弾ける人を愛するようになる媚薬を飲まされた。その数日後、アンドリューはアリスに出会った。アリスはヴァイオリンが弾けたため、アンドリューはアリスを愛するようになった。

この事例では、アンドリューのアリスに対する愛は、ヴァイオリンが弾けるというアリスの性質によって引き起こされているが、それにもかかわらず、それは真の愛ではないように思われる。そして、このことは、CT2 が依然として必要条件としては弱すぎることを意味しているのである。

4.2.3 CTL3

ここで、次の点に注目してみよう。事例 3 では、もし媚薬の効用がなければ、アンドリューがアリスを愛することはなかっただろう。なぜなら、事例 3 では、アンドリューのアリスに対する愛は、ヴァイオリンを弾けるというアリスの性質が、アンドリューが飲まされた媚薬の効用と合わさることによって、複合的に引き起こされているからである。より厳密に言えば、〈アンドリューのアリスに対する愛が、ヴァイオリンを弾けるというアリスの性質によって引き起こされること〉が、媚薬によって引き起こされているのである。このように考えて、CTL2 を次の CTL3 に修正するべきであると主張する人もいるかもしれない。

CTL3 : x が y を愛しているとき、その愛が真の愛であるのは、その愛が、 y がある特定の性質（群） S を持っている（と x が認識している）ことによってのみ引き起こされている場合に限られる。

しかし、ナールが指摘しているように、CTL3 はそもそも偽である (Naar 2016, pp.199-200)。次の事例 4 を見てほしい。

【事例 4】

ベッティは、ヴァイオリニストの生き様を描いた映画を見て非常に感動したため、ヴァイオリンを弾ける人に強く憧れるようになった。その数日後、ベッティはブライアンに出会った。ブライアンはヴァイオリンが弾けたため、ベッティはブライアンを愛するようになった。

事例 4 では、もしベッティがこの映画を見ていなければ、ベッティがブライアンを愛することはなかっただろう。なぜなら、ベッティのブライアンに対する愛は、ヴァイオリンを弾けるというブライアンの性質が、ベッティが見た映画の影響と合わさることによって、複合的に引き起こされているからである。より厳密に言えば、事例 4 では、〈ベッティのブライアンに対する愛が、ヴァイオリンを弾けるというブライアンの性質によって引き起こされること〉が、映画によって引き起こされているのである。それにもかかわらず、ベッティのブライアンに対する愛は真の愛である（または、真の愛であり得る）よ

うに思われる。もしそうであるならば、事例 4 は CTL3 の反例になるから、CTL3 は偽であることになるだろう。

4.2.4 強制原因と誘発原因

ここまでの議論を整理するために、二つの用語を導入しよう。一つ目の用語は「強制原因」である。この用語は次のように定義される。

強制原因： x が y を愛しているとき、あるもの FO がその愛の強制原因であるのは、FO が次の二つの条件を満たしている場合であり、かつ、その場合に限られる。

- (1) $\langle x$ の y に対する愛が、 y が特定の性質（群） S を持っている（と x が認識している）ことによって引き起こされること〉が、FO によって引き起こされている。
- (2) x の y に対する愛は、(1) のせいで、真の愛ではなくなってしまう。

強制原因には、例えば、事例 3 の媚薬が含まれる。それ以外にも、洗脳、暗示、魔法、マッドサイエンティストによる脳の操作など、様々なものが強制原因に該当するだろう。これらを使えば、事例 3 に似た事例をいくらでも作ることができるのである。

二つ目の用語は「誘発原因」である。この用語は次のように定義される。

誘発原因：x が y を愛しているとき、あるもの FA がその愛の強制原因であるのは、FA が次の二つの条件を満たしている場合であり、かつ、その場合に限られる。

(1) 〈x の y に対する愛が、y が特定の性質（群）S を持っている（と x が認識している）ことによって引き起こされること〉が、FA によって引き起こされている。

(2) x の y に対する愛が、(1) のせいで、真の愛ではなくなってしまうなどということはない。

誘発原因には、例えば、事例 4 の映画が含まれる。それ以外にも、生育環境、出会ったときの雰囲気、友人の説得、体調、精神状態、予期せぬ身体的接触など、様々なものが誘発原因に該当するだろう¹⁴。やはり、これらを使えば、事例 4 に似た事例をいくらかでも作ることができるのである。

これらの用語を使うと、ここまでの議論を次のように整理することができる。CTL2 が必要条件として弱すぎるのは、CTL2 では、強制原因の事例を真の愛の事例から排除できないからだだった。その一方で、CTL3 が偽であるのは、CTL3 は強制原因の事例を真の愛の事例から排除することはできるが、それと同時に、誘発原因の事例も真の愛の事例から排除してしまうからだだった。したがって、今しなければならぬことは、強制原因の事例だけを真の愛の事例から排除し、

¹⁴ ナールによれば、「私たちは、これらのものが、私たちの恋愛関係において、重要な役割を果たすことを必要としている。つまり、これらの要因の少なくとも一部がなければ、多くの関係は存在すらしなかつただろうし、他の多くの関係は減衰していっただろう」（Naar 2016, p.200）。

誘発原因の事例は真の愛の事例から排除しないように、CTL2 を修正することである。

4.2.5 CTL4

そこで、強制原因と誘発原因の相違点を考えてみよう。強制原因と誘発原因は、いずれも〈x の y に対する愛が、y が特定の性質 S を持っていることによって引き起こされること〉を引き起こす。ところが、このことによって、強制原因は x の y に対する愛からその真正さを奪うことになるが、誘発原因はそのようなことはしないのである。なぜこうした違いが生じるのだろうか。おそらく、それは、強制原因と誘発原因とで、〈x の y に対する愛が、y が特定の性質 S を持っていることによって引き起こされること〉を引き起こす因果的プロセスが異なるからだろう。

では、さらに踏み込んで、その因果的プロセスがどのような点で異なっているのかを考えてみよう。このことについて、私はナールの議論を敷衍して、次のように主張したい (Naar 2016, p.200)。強制原因は、まず、x に「y が持つ特定の性質 S は価値あるものである」という信念を植え付ける。そして、そうすることで、〈x の y に対する愛が、y が特定の性質 S を持っていることによって引き起こされること〉を引き起こす。その一方で、誘発原因は、まず、x が「y が持つ特定の性質 S は価値あるものである」という信念を自ら獲得するように、言い換えれば、x が S の価値に自ら気づくように、x を「促す」

(facilitate)¹⁵。つまり、誘発原因は S の価値に注目させたり、S の価値を際立たせたりするのである。そして、そうすることで、〈x の y に対する愛が、y が特定の性質 S を持っていることによって引き起こされること〉を引き起こすのである。

強制原因と誘発原因のこの相違点を踏まえると、CTL2 は次の CTL4 に修正されるべきであることがわかるだろう。

CTL4: ある人 x が別の人 y を愛しているとき、その愛が真の愛であるのは、次の二つの条件の両方が同時に満たされている場合に限られる。

(1) x の y に対する愛が、y がある特定の性質（群）S を持っている（と x が認識している）ことによって引き起こされている。

(2) (1) が、x が S の価値に自ら気づくことによって引き起こされている。

CTL4 は、強制原因の事例だけを真の愛の事例から排除し、誘発原因の事例は真の愛から排除しない。なぜなら、強制原因の事例は (2) を満たさないが、誘発原因の事例は (2) を満たすからである。実際、強制原因の事例である事例 3 では、アンドリューは、「ヴァイオリンを弾けるという性質は価値あるものである」という信念を、媚薬によ

¹⁵ この「促す」という言い回しはナールによるものである (Naar 2016, p.200)。ただし、ナールはこの言い回しが厳密には何を意味するかについては、本稿ほど詳細に議論していない。

って植え付けられている。しかし、誘発原因の事例である事例 4 では、ベッティは、「ヴァイオリンを弾けるという性質は価値あるものである」という信念を自ら持つように、言い換えれば、ヴァイオリンを弾けるという性質の価値に自ら気づくように、映画によって促されているだけなのである。

CTL4 は、CTL2 と比較すると、必要条件として弱すぎるということはないだろう。なぜなら、CTL4 の (1) と (2) を満たすが、それにもかかわらず、 x の y に対する愛が真の愛ではないような事例は、私が見る限り、見当たらないからである。したがって、CTL の「適切な因果的なプロセスによって」という部分は、CTL4 の (1) と (2) の両方を同時に満たす因果的なプロセスと解釈されるべきなのである。そこで、これ以降は、「愛の因果説」という言葉を、CTL4 を意味するものとして使うことにしよう。

4.3 AL 自由意志

さて、ここまでの議論から、真の愛にとって必要なタイプの自由意志、すなわち、AL 自由意志がどのようなものであるかが明らかになる。私の見解では、AL 自由意志は、CTL の「適切な因果的なプロセス」、すなわち、CTL4 の (1) と (2) の両方を同時に満たす因果的なプロセ

スである¹⁶。したがって、AL 自由意志とは、次のようなタイプの自由意志である¹⁷。

AL 自由意志：x が y を AL 自由意志によって愛しているのは、次の二つの条件の両方が同時に満たされている場合であり、かつ、その場合に限られる。

(1) x の y に対する愛が、y がある特定の性質（群）S を持っている（と x が認識している）ことによって引き起こされている。

(2) (1) が、x が S の価値に自ら気づくことによって引き起こされている。

この AL 自由意志は AL 要件の両方を同時に満たす。まず、この AL 自由意志は(第 3 節で見た物語に登場する惚れ薬や媚薬などによる)強制とは両立しない。なぜなら、惚れ薬や媚薬は強制原因だが、すでに見たように、強制原因は (2) を満たさないからである。したがって、この AL 自由意志は AL 要件 1 を満たす。次に、この AL 自由意志は（第 3 節で見た詩歌の中で表現されている）愛の抗い難さと両

¹⁶ 因果的プロセスを自由意志と見なすことに疑問を感じる人がいるかもしれない。しかし、現代の自由意志問題においては、因果的プロセスを自由意志と見なすことは、それほど珍しいことではない (e.g. Sartorio 2016)。

¹⁷ このことから、非 AL 自由意志がどのようなタイプの自由意志であるかも明らかになる。例えば、「実際にする行為とは別の行為をすることもできる」という別可能性 (alternative possibility) は自由意志の典型であるように思われるかもしれないが、これは非 AL 自由意志であることになるだろう。実際、「実際に愛している人とは別の人を愛することもできる」という別可能性は、真の愛にとって不要であるどころか、真の愛を阻害するものであるようにすら思われる。

立する。なぜなら、(1) と (2) の両方を同時に満たす因果的プロセスが、 x にとって抗い難い、止められないものであるということは、十分にあり得ることだからである。したがって、この AL 自由意志は AL 要件 2 も満たす。さらに、当然のことながら、この AL 自由意志はこの世界に存在し得るだろう。以上によって、戦略 γ が、直観に反した強硬な選択肢である戦略 α と戦略 β に比べると、より有望な選択肢であるということが示されたはずである。

5. 愛の因果説に対する反論と擁護

前節で提示し、洗練化した愛の因果説については、いくつかの反論が予想される (cf. Helm 2017, sec.6)。ここでは、その中でも特に重要な二つの反論を取りあげて、愛の因果説を擁護することを試みる。

5.1 フェティシズムによる反論

一つ目は、愛の因果説がソーブルの言葉で言えば「性質基盤的」であることに向けられた反論である。愛の因果説によれば、 x の y に対する愛を引き起こすのは、 y が持つ特定の性質 S でなければならない。しかし、このことは、 x の y に対する愛が、実は y という人格を対象とした対人的愛ではなく、 S という性質を対象とした非対人的愛であることを意味するのではないだろうか。もしそうであるならば、愛の因果説が規定している愛は、ある意味でフェティシズムに過ぎないことになり、したがって、真の愛ではないことになるだろう。こ

ここでは、この反論を「フェティシズムによる反論」と呼ぶことにしよう¹⁸。

愛の因果説に関して注意しなければならないのは、愛の因果説は愛の本性論ではないという点である。つまり、愛の因果説は、真の愛が生じるプロセスについての理論に過ぎず、愛を構成する要素についての理論ではないのである。ひょっとすると、 x が y を愛していることは、 x が y に対して特定の情動を抱いていることや、 x が y に対して公平無私なケアを向けていること、 x が y に関して肯定的な価値判断を下していること、 x と y が「私たち」という統一体を形成していることなど、様々な要素によって構成されているかもしれない¹⁹。しかし、愛の因果説は、愛がどのような要素によって構成されているかという問題に関しては、完全に中立的である。愛の因果説は、たとえどのような要素によって愛が構成されていようとも、それが真の愛である限りは、その愛は適切な因果的プロセスによって引き起こされていなければならない、と主張しているに過ぎないのである。

このことを踏まえると、愛の因果説は、フェティシズムによる反論に対して、次のように応答することができる。確かに、愛の因果説では、愛が単なるフェティシズムではないことを保証することはできない。しかし、このことを保証するのは、愛の因果説の仕事ではなく、愛の本性論の仕事である。例えば、愛の本性論として、 x が y を愛していることは、 x が y に対して特定の情動を抱いていることであると

¹⁸ フェティシズムによる反論は、もともと、ヴラストスがプラトンの愛の理論に対する批判として提示したものである (Vlastos 1981, pp.31-32)。

¹⁹ これらの愛の本性論については、ヘルムのサーヴェイを参照すること (Helm 2017)。

主張する理論を選択したとしよう。この場合であれば、次のように言うことができるだろう。y が怠惰という性質を持つことが、x の怒りを引き起こしているとする。しかし、当然のことながら、このことは、x の怒りが怠惰という性質を対象とした非対人的怒りであることを意味するわけではない。むしろ、x の怒りは y という人格を対象とした対人的怒りであるように思われる。もしそうであるならば、同じことが愛についても言えるのではないだろうか。つまり、たとえ x の愛を引き起こしているのが、y が持つ特定の性質 S であるとしても、このことは、x の愛が S という性質を対象とする非対人的愛、すなわち、フェティシズムに過ぎないことを意味するわけではないのである。このように、愛の因果説は、適切な愛の本性論を選択することで、フェティシズムによる反論を回避することができるだろう。

5.2 互換性による反論

5.2.1 互換性と愛の深化

二つ目の反論も、やはり、愛の因果説が「性質基盤的」であることに端を発するものである。愛の因果説によれば、x の y に対する愛が、y が持つ特定の性質 S によって引き起こされるプロセスには、x が S の価値に自ら気づくことが含まれていなければならない²⁰。しか

²⁰ このことは、どのような性質を持つ人を愛するべきかに関する規範が存在することを示唆している。例えば、オスカー・ワイルドの『真面目が肝心』という喜劇を考えてみよう。この喜劇の主人公であるジャックは、「アーネスト」という偽名を使っている間にグウェンドリンと出会い、二人は愛し合うようになる。ところが、グウェンドリンがジャックのことを愛しているのは、ジャックの名前がグウェンドリンにとって世界で最も美しい名前である「アーネスト」だと、グウェンドリンが思い込んでいるからに過ぎないのである。この場合、グウェンド

し、このことを踏まえると、もし y 以外に S を持っている人 z がいるならば、つまり、もし z が S に関して y と「互換可能」(fungible)であるならば、 x は y ではなく z を愛してもよいことになるのではないだろうか。それどころか、もし S に関して y よりも優れている人 z がいるならば、つまり、もし z が S に関して y の「上位互換」であるならば、 x は y ではなく z を愛すべきであることになるのではないだろうか。ところが、こうした意味での互換性を許容する愛は、真の愛であるようには思われない。もし x の y に対する愛が真の愛であるならば、 y は x にとってかけがえのない人でなければならないはずである。ここでは、この反論を「互換性による反論」と呼ぶことにしよう²¹。

互換性による反論に対して、愛の因果説は、愛は時間とともに育つという当たり前の事実を目を向けることで、応答することができるかもしれない。 x が y に一目惚れし、 y を愛するようになったとしよう。最初のうちは、 x の y に対する愛は、 y が持つ特定の価値ある性質 $S1$ (例えば、容姿の美しさ) によって引き起こされている。当然のことながら、この段階では、 x の y に対する愛は互換性を許容す

リンのジャックに対する愛は、真の愛ではないだろう。なぜなら、ある人が特定の名前であるということだけでその人を愛することは、間違ったことであるように思われるからである。このように、もし愛に規範が存在するならば、愛はソープルが言うように「理由依存的」であることになるだろう (注 11 参照)。

²¹ ヘルムが指摘しているように、互換性による反論はフェティシズムによる反論とは異なる (Helm 2017, n.18)。なぜなら、「もし S に関して y と互換可能な人 z がいるならば、 x は y ではなく z を愛してもよい」ということは、「 x が愛しているのは、 y という人ではなく、 S という性質である」ということを含意しないからである。仮に z は S に関して y と互換可能であるという理由だけで、 x が y ではなく z を愛するようになったとしても、それは x の愛の対象が y から z に変わったことを意味するだけかもしれないのである。

る。つまり、もし S1 に関して y と互換可能な人 z がいるならば、x は y ではなく z を愛してもよいのである。しかし、時間が経過し、x の y に対する愛が深まれば深まるほど、その愛は互換性を許容しなくなる。例えば、x は、y と話すようになったことで、もう少し y のことを知るようになり、その結果、y が S1 以外の価値ある性質 S2（例えば、親切さ）を持つことにも気づいたとしよう。このとき、x の y に対する愛は、S2 によって強化されるだろう。このことは、x の y に対する愛が、以前よりも互換性を許容しないものになったことを意味している。なぜなら、S1 と S2 の両方に関して y と互換可能な人は、S1 に関してのみ y と互換可能な人よりも、必然的に少なくなるからである。このプロセスをくり返していくと、何らかの性質 S_n の段階で、S1 から S_n までのすべての性質に関して y と互換可能な人は、y 自身を除いて、この世界には一人も存在しなくなるだろう。このように、互換性を許容しない真の愛は、時間をかけて徐々に醸成されていくのである。

5.2.2 原理的互換性と歴史関係的性質

しかし、愛の因果説からのこうした応答には、不満を感じる人がいるかもしれない。不満を感じる理由は少なくとも二つある。一つ目の理由は次の通りである。愛の因果説からの応答が正しいと仮定すると、x の y に対する愛が、y が持つ特定の性質 S によって引き起こされている場合、その愛が真の愛であるためには、S に関して y と互換可能な人がこの世界に一人も存在してはならないことになる。ところで、このことから、次の二つの主張を導き出すことができる。第

一に、この世界の愛のほとんどは、真の愛ではない。なぜなら、S がどのような性質であれ、S に関して y と互換可能な人がこの世界に一人も存在しないということは、ほとんどあり得ないことのように思われるからである。第二に、真の愛は殺人によって実現できるかもしれない。なぜなら、この世界に存在する S に関して y と互換可能な人をすべて殺せば、S に関して y と互換可能な人はこの世界に一人も存在しなくなるからである。しかし、これら二つの主張は、いずれも受け入れがたい。

二つ目の、そしてより根本的な理由は次の通りである。x の y に対する愛が、y が持つ特定の性質 S によって引き起こされていて、かつ、奇跡的に、S に関して y と互換可能な人が、この世界には一人も存在しないとしよう。ところが、当然のことながら、このことは、S に関して y と互換可能な人が原理的に存在し得ないということの意味するわけではない。依然として、もし S に関して y と互換可能な人 z がいるならば、x は y ではなく z を愛してもよいのである。しかし、もしそうであるならば、x の y に対する愛は、真の愛であるとは言えないだろう。つまり、真の愛は原理的互換性も許容しないように思われるのである。

では、愛の因果説は、以上のような不満に対して、どのように応答することができるだろうか。その方法の一つは、ソーブルやバドワーのように、私たちの愛は結局のところ互換性を許容するものでしかなく、したがって、この世界には真の愛など存在しないということを受け入れることである (Soble 1990, ch.13; Badhwar 2003)。つまり、真の愛は目指すべき理想に過ぎず、私たちがこの世界で実現できる

ようなものではないのである。しかし、ここでは、このいささかりアリスティックな方法は採用せず、デラニーが採用しているロマンティックな方法を検討することにしたい (Delaney 1996, pp.343-347)。

デラニーもまた、愛は時間とともに育つということに注目する。デラニーの議論を私なりに敷衍すると、次のようになるだろう。x が y に一目惚れし、y を愛するようになったとする。さらに、その後、x は y とともに多くの時間を過ごし、その中で、y と趣味の話をしたり、y と出かけたり、y に励ましてもらったり、y に窮地から救ってもらったりしたとする。つまり、x と y は「x は y と趣味の話をした」、「x は y と出かけた」、「x は y に励ましてもらった」、「x は y に窮地から救ってもらった」といった出来事のトークンをともに体験したのである。このことは、y がこれらの出来事のトークンを x とともに体験したという性質、すなわち、デラニーの言葉で言えば、「歴史関係的性質」(historical-relational properties) を獲得したということの意味している (Delaney 1996, p.346)。このとき、x の y に対する愛が、この歴史関係的性質によって強化されることは想像に難くない。そして、もしそうであるならば、x の y に対する愛は互換性をまったく許容しなくなるだろう。なぜなら、この歴史関係的性質に関して y と互換可能な人は、単にこの世界に存在しないだけでなく、原理的に存在し得ないからである。例えば、ある可能世界において、「x は y に窮地から救ってもらった」という出来事のトークンが生じたならば、その可能世界には、その出来事のトークンを x とともに体験したという性質を持つのは、y 以外には存在しない。したがって、x の y に対する愛が、y が持つ特定の歴史関係的性質 HRP によって

強化されている場合には、どの可能世界においても、HRP に関して y と互換可能な人 z は存在しないことになるから、「もし HRP に関して y と互換可能な人 z がいるならば、 x は y ではなく z を愛してもよい」と言うことは無意味なのである²²。このように、愛は時間とともに育つということの本当の意味は、愛は歴史関係的性質による強化によって真の愛に昇華することだったのである。

6.2.3 通時的互換性と基礎的応報

ところが、歴史関係的性質に訴えるこうした解決法に対して、ヘルムは次のような疑義を呈している (Helm 2017, sec.6)。 x の y に対する愛は、 y が持つ特定の非歴史関係的性質 S (例えば、容姿の美しさや親切さ) と特定の歴史関係的性質 HRP (例えば、 y が「 x は y に窮地を救ってもらった」という出来事を x とともに経験していること) によって引き起こされているが、あるとき、 y は悲劇的な出来事に見舞われて、 S をほとんど失ってしまったとしよう。さらに、ちょうど同じころに、 x は悲劇的な出来事に見舞われた後の y よりも、 S に関して優れている人 z に出会ったとしよう。この場合、 x は y ではなく z を愛するようになってはいけないのだろうか。直観的には、 x は y

²² 「もし『 x は y に窮地から救ってもらった』という出来事のトークンを x と共に経験したという性質に関して y と互換可能な人 z がいるならば、 x は y ではなく z を愛してもよい」という命題と、「もし x が y ではなく z に窮地から救ってもらったならば、 x は y ではなく z を愛してもよい」という命題を混同してはならない。前者の命題の前件は常に偽だが、後者の命題の前件は真であるときも偽であるときもある。さらに言えば、後者の命題は全体として真だろう。仮にあなたが現在の恋人と経験してきたことのすべてを、現在の恋人とではなく、別の人と経験したならば、あなたは、現在の恋人ではなく、その人を愛してもよいように思われる。

を愛し続けるべきであって、 z を愛するようになってはいけないうに思われる。もし x が y ではなく z を愛するようになったならば、 x の y に対する愛は真の愛ではなかったことになるだろう。つまり、真の愛はこの通時的互換性も許容しないように思われるのである。このことを説明するためには、愛の因果説は HRP に訴えるしかない。つまり、愛の因果説によれば、 x が y を愛し続けるべきであるのは、 y が HRP を持っているからなのである。しかし、そのように言えるのはなぜだろうか。 y が HRP を持っていることから、 x が y を愛し続けるべきであることは、本当に帰結するのだろうか。ヘルムは、このように問うことで、愛の因果説が通時的互換性の問題に答えられないことを示そうとするのである。

私の考えでは、 y が HRP を持っていることから、 x が y を愛し続けるべきであることが帰結する。ところが、ここで、私たちは「岩盤」に衝突することになる。つまり、 y が HRP を持っていることから、 x が y を愛し続けるべきであることは確かに帰結するが、このことを説明するために、さらに基礎的な事柄に訴えることはできないのである。しかし、それでも、「しかるべき特徴に注意を引くこと、これらの特徴を示すためにいくつかのものを並べて置くこと」はできるだろう。そこで、愛を感謝と比較してみることにしよう。ある人 y が別の人 x に何らかのすばらしい行為 ϕ をしたとする。このとき、 y は x の感謝に値する (deserve) だろう。それも、 y が x の感謝に値するのは x が y に感謝することで、 y が今後も ϕ をし続ける可能性が高くなるからではない。実際、たとえ x が y に感謝することで、 y が今後も ϕ をし続ける可能性が高くなるわけではないとしても、 y は x

の感謝に値するはずである。つまり、もし y が x に ϕ をしたならば、ただそれだけの事実によって、 y は x の感謝に値するようになるのである²³。私の考えでは、同じことが愛についても言える。つまり、もし y が何らかの出来事のトークンを x とともに経験することで、特定の歴史関係的性質 HRP を獲得したならば、ただそれだけの事実によって、 y は x の愛に値するようになるのである²⁴。 y が HRP を持っていることから、 x が y を愛し続けるべきであることが帰結するということの説明のために、さらに基礎的な事柄に訴えることができないのは、このためなのである。

6.2.4 愛の因果説についての根本的な不安とその解消

ひょっとすると、ここまで見てきた互換性による反論に共感する人は、愛の因果説について、次のような根本的な不安を抱いているのかもしれない。愛の因果説によれば、 x の y に対する愛が、 y が持つ特定の性質 S によって引き起こされるプロセスには、 x が S の価値に自ら気づくことが含まれていなければならない。しかし、このように主張することは、陳列された商品を手にとって品定めをするときのような態度を、愛という概念の中に持ち込むことになる。つまり、愛の因果説は、この「品定め」と愛の概念を、必然的に結びつけ

²³ このことをペレブームは基礎的応報 (basic desert) と呼んでいる (Pereboom 2014, p.4)。ペレブームがこれを「基礎的」と言っているのは、ある人 y が別の人 x に何らかの素晴らしい行為 ϕ をしたことからは、 x が y に感謝するべきであることが帰結するが、このことを説明するために、さらに基礎的な事柄に訴えることはできないからである。

²⁴ もちろん、 y がどのような歴史関係的性質を獲得すれば、ただそれだけの事実によって、 y が x の愛に値するようになるのかという問題については、議論の余地があるだろう。

てしまうのである。しかし、この「品定め」は真の愛とは相反するものであるように思われる²⁵。もしそうであるならば、愛の因果説は、根本的に、真の愛を排除する性格があることになってしまうのではないだろうか。

しかし、私の見立てでは、この不安はある誤解によって生じているものであり、その誤解を取り除けば解消される。それは、人間は互換性を許容する価値しか持ちえないという誤解である。もちろん、人は互換性を許容する価値をたくさん持っている。例えば、ある仕事を達成することができるという性質は、互換性を許容する。なぜなら、もし二人の人間の両方がその性質を持つならば、どちらにその仕事をやらせてもらってもよいからである。これは、1000 円の商品を買うのに、どの 1000 円札を使ってもよいのとまったく同じである。もし人間がこのような価値しか持たないのであれば、ある人間が持つある性質の価値に気づくということは、その人間を「品定め」することにしかないだろう。

ところが、人間はそうした互換性を許容する性質しか持たないわけではない。すでに見たように、歴史関係的性質は互換性をまったく許容しない性質だった。したがって、ある人間が持つある歴史関係的性質の価値に気づくこと、すなわち、その歴史関係的性質がその人間を愛するに値するものにしていることに気づくことは、決してその

²⁵ カントの言葉を借りるならば、ある人を「品定め」することは、その人を単なる手段と見なすこと、言い換えれば、その人を物件と見なすことであり、したがって、その人の尊厳を認めないことであると言えるだろう。しかし、真の愛は相手の尊厳を認めることを含むはずである。「品定め」と真の愛が相反するよう思われるのは、このためである。ヴェルマンは、こうした考えから、相手の尊厳を認めることを愛の本性の一つに数え上げている (Velleman 1999)。

人間を「品定め」することではなく、むしろ、その人間をかけがえのないものとして見ることになるのである。このことを踏まえると、愛の因果説についての根本的な不安、すなわち、愛の因果説は「品定め」と愛の概念を結びつけるから、必然的に真の愛を排除してしまうことになるのではないかという不安は、解消されるはずである。

結論

本稿では、真の愛は一方で自由意志を必要とするように思われるが、他方で自由意志を必要としないようにも思われるという問題、すなわち、愛のアンチノミーを考察してきた。私は、この問題を解決するために、真の愛にとって必要な自由意志とそうでない自由意志、すなわち、AL 自由意志と非 AL 自由意志を区別し、愛のアンチノミーを解消するという戦略を採用した。また、私は、この戦略が有望であることを示すために、愛の因果説を洗練化することで、AL 自由意志がどのようなタイプの自由意志であるかを明らかにした。愛の因果説によれば、 x の y に対する愛が真の愛であるためには、〈 x の y に対する愛が、 y が持つ特定の性質 S によって引き起こされること〉が、 x が S の価値に自ら気づくことによって引き起こされていなければならない。この因果的プロセスこそが AL 自由意志なのである。

最後に、本稿の考察が、愛のアンチノミー以外の哲学的な問題に対して、どのような含意を持ち得るかを簡単に見ておこう。第一に、本稿の考察は、自由意志問題に対して、重要な含意を持つ²⁶。自由意志

²⁶ 自由意志問題については、別の論文で簡単に解説した（井保 2020）。

問題においては、愛は自由意志に基づいているように思われるから、もし自由意志が決定論によって脅かされるならば、愛もまた決定論によって脅かされることになるのではないかという問題が議論されている (e.g. Anglin 1990; Kane 1998; Ekstrom 2000; Strawson 2004; Pereboom 2014)。しかし、本稿の考察を踏まえると、愛が決定論によって脅かされることはないということがわかるはずである。なぜなら、愛が基づいている自由意志は AL 自由意志であり、そして、AL 自由意志は明らかに決定論と両立するからである²⁷。

第二に、本稿の考察は、エンハンスメントの倫理に対しても、重要な含意を持つ。エンハンスメントの倫理においては、神経生理学的な介入によって、愛を惹起、増強、維持、終焉させることに伴う倫理的な問題が議論されている (e.g. Savulescu & Sandberg 2008; Nyholm 2015; Naar 2016)²⁸。その中でも特に論争的であるのは、神経生理学的な介入は、惚れ薬や媚薬のように、愛の真正さを損なうのではないかという問題である。しかし、本稿の考察を踏まえると、神経生理学的な介入が必ずしも愛の真正さを損なうわけではないことは明らかだろう。なぜなら、神経生理学的な介入が愛の真正さを損なうかどうかは、それが AL 自由意志と両立するかどうか、言い換えれば、それ

²⁷ 実際、愛が決定論や自由意志（非 AL 自由意志）の欠如によって脅かされることはないということは、心理学的な研究によっても支持されている (Boudesseul et al. 2016)。

²⁸ 愛にはエストロゲン、テストステロン、アドレナリン、ドーパミン、セロトニン、オキシトシン、バソプレッシンなどの物質がかかわっているため、これらを遺伝子治療や薬などによって操作することができれば、愛に介入することができると考えられている (cf. Savulescu & Sandberg 2008)。

が強制原因として作用するか、それとも誘発原因として作用するかによるからである²⁹。

文献

- Anglin, W. S., 1990, *Free Will and the Christian Faith*, Oxford University Press.
- Badhwar, Neera K., 2003, "Love", in H. LaFollette (ed.), *Practical Ethics*, Oxford University Press, pp.42-69.
- Boudesseul, J. et al., 2016, "Free Love? On the Relation between Belief in Free Will, Determinism, and Passionate Love", *Consciousness and Cognition*, 46, pp.47-59.
- Delaney, Neil, 1996, "Romantic Love and Love Commitment: Articulating a Modern Ideal", *American Philosophical Quarterly*, 33, pp.375-405.
- Ekstrom, Laura, W., 2000, *Free Will: A Philosophical Study*, Westview Press.
- Helm, Bennett, 2017, "Love", 2017 Fall ed., in E. N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Kane, Robert, 1998, *The Significance of Free Will*, Oxford University Press.
- Naar, Hichem, 2016, "Real-World Love Drugs: Reply to Nyholm", *Journal of Applied Philosophy*, 33(2), pp.197-201.

²⁹ この点については、ナールも同様の結論に至っている（Naar 2016）。

- Nyholm, Sven, 2015, "Love Troubles: Human Attachment and Biomedical Enhancements", *Journal of Applied Philosophy*, 32(2), pp.190-202.
- Mele, Alfred, 2006, *Free Will and Luck*, Oxford University Press.
- Pereboom, Derk, 2014, *Free Will, Agency, and Meaning in Life*, Oxford University Press.
- Pettit, Philip, 2015, *The Robust Demands of the Good: Ethics with Attachment, Virtue, and Respect*, Oxford University Press.
- Sartorio, Carolina, 2016, *Causation and Free Will*, Oxford University Press.
- Savulescu, Julian and Sandberg, Anders, 2008, "Neuroenhancement of Love and Marriage: The Chemicals Between Us", *Neuroethics*, 1, pp.31-44.
- Soble, Alan, 1990, *The Structure of Love*, Yale University Press.
- Sternberg, Robert J., 1986, "A Triangular Theory of Love", *Psychological Review*, 93, pp.119-135.
- Strawson, Galen, 2004, "Free Will", in E. Craig (ed.), *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, Routledge.
- Velleman, J. David, 1999, "Love as a Moral Emotion", *Ethics*, 109, pp.338-374.
- Vlastos, Gregory, 1981, *Platonic Studies*, 2nd ed., Princeton University Press.

井保和也、2020、「自由意志問題の見取り図：自由意志問題とはどのような問題なのか?」、金沢大学哲学・人間学研究会（編）、『哲学・人間学論叢』、11、pp.31-52。

金政祐司・大坊郁夫、2003、「愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係」、『感情心理学研究』、10、pp.11-24。

（いほ かずや 京都大学 文学研究科 非常勤講師）